回想法を軸に博物館資源を活かした高齢者ボランティア活動の試み

師勝町歴史民俗資料館学芸員　市橋芳則

1　回想法・高齢者ケアの古くて新しいツール

―博物館と福祉と医療の連携により実現する高齢者ケアの取り組みと経緯

師勝町歴史民俗資料館は平成２年に開館。平成５年より昭和時代をテーマとした展示会を展開し資料の収集・保存に取組み、同９年には、「日常が博物館入りする時」と題した特別展で館全体を昭和 30 年代の資料で構成、「昭和日常博物館」という呼称を設定した。

展示会場には懐かしい資料が並びそこで来館者が発する言葉は、自らの経験、キオクに基づいている。言い換えれば、博物館が多くの方々のキオクをも資料として扱うということにもなる。

本館では、平成１１年に「ナツカシイってどんな気持ち～ナツカシイをキーワードに心の中を探る。」と題して企画展を行い、回想法と収蔵品の新たな関わりを提言した。本館の展示会場では、自然多発的にキオクが掘り起こされ、来館者の笑顔を引き出している。

そして、回想法事業を広く地域で展開し、高齢者の健康維持、認知症の予防といった介護予防事業を実施するため、本館と収蔵資料及び明治時代の旧家である国登録有形文化財「旧加藤家住宅」を活用し、総合福祉センター「もえの丘」が主事業をリードしていく図式が構築された。１４年度には、「師勝町回想法センター」が旧加藤家敷地内に開所し、本稿３に一部記載する事業が進められている。

2　高齢者ケアに博物館という場の提供

（1）「モノ語りの博物館講座」の実施

増加する高齢者、高齢社会の到来に向け高齢者の学習活動への参加を促し、多様なニーズにこたえ、学習成果を活用できる機会を充実していくことが求められている。そこで、生涯学習と高齢者ケア・認知症予防を積極的に結びつけ、そのコネクターとしての回想法の手法を用い「モノ語りの博物館講座」を開催した。８回の講座は、グループ回想法の手法を用い、リーダーに保健師、サブリーダーに学芸員がグループに加わり、博物館の展示を高齢者の記憶を活用して構成していった。

回	内　　容
1	自己紹介・資料館見学
2	懐かしい話「遊びの思い出」
3	懐かしい話「夏休みの思い出」
4	展示のテーマを選ぶ「魚捕り」「かき氷」「行水」
5	テーマについて詳しく話し合う
6	展示する資料を選ぶ。展示の解説を考える。
7	展示しながら、よりわかりやすい説明を考える。
8	自己紹介の色紙を作成し、展示を完成させる。

（2）回想法そして博物館ボランティア

本町で実施したこれまでの回想法スクールは、８回のセッションが終わったあとも、同窓会という形式でその後も集まる機会をグループの力で設けている。この講座に参加いただいた高齢者には、修了した後も博物館の展示の説明、次の展示会の準備においても様々な記憶を提供していただいている。

これにより、長期的に回想法を通して、自らの健康を保っていくよりどころとして利用していただくとともに博物館ボランティアとして活躍中である。

3　地域における回想法の可能性　―博物館資源と文化財建造物と回想法センターを拠点に

師勝町では､博物館資源と文化財建造物を活用しながら拠点としての回想法センターを置き、回想法を介護予防事業として、地域で展開してきた。回想法が地域の人々に介護予防ツールとして広く受け入れられるため平成 14 年度から継続して行っている。

（1）回想法スクールの実施

基本的な参加形態は、週 1 回、1 時間 30 分程度の回想法スクールと呼んでいる集まりで、10 名ほどの高齢者がグループを形成し、楽しい回想法の時間を過ごすことに始まる。

回想法スクールによるグループ形成は、お互いの思い出や生い立ちを話題として提供していくことにより、個々人のつながりが急速に高められ、結束力、グループ力の向上が見られる。とくに、健康高齢者のグループは、短時間で仲間づくりができ、結束が強いのが特徴的であるといえる。スクール終了後も積極的に自主活動が継続され、様々な回想が語られ、その表情は活き活きと輝いている。

【回想法スクールの一例】

	テ　ー　マ	内　　容	使用道具等
1	自己紹介	参加者の自己紹介	
2	小学校の思い出	当時の教科書等の思い出	昔の教科書
3	遊びの思い出	お手玉や竹とんぼ等の思い出	お手玉、竹とんぼ
4	ご飯炊きの思い出	食事やご飯炊きの思い出	復元のくど、釜
5	食事支度の思い出	とろろご飯など食事の思い出	すり鉢
6	お手伝いの思い出	子守りなどお手伝いの思い出	乳母車
7	お洗濯の思い出	洗濯板での洗濯の思い出	洗濯板、たらい
8	茶話会・感想	こうせんを食べながら感想	こうせん

（2）「いきいき隊」の活躍

回想法スクール終了後、継続を目的としたＯＢ会（いきいき隊）が結成され、現在会員数１００名を超えている。各グループの定例活動や全体の交流会の開催や準備等で回想法センターが賑わっている状況である。回想法センターは当初から介護予防、地域支援事業の場であるとともに、コミュニティーの場としての活用が望まれていたことから、徐々にその環境が整い、ＯＢ会の支援にも力が注がれてきた。そして、その高齢者の力が地域づくりに活用される状況となってきている。

（３）回想法センター及び「いきいき隊」の活動状況

①コミュニティーセンターとしての活動

□ボランティアによる紙芝居やオープン回想法の開催

□懐かしい場、聴き手がいる場の提供

個人や団体がふらりと訪れ、スタッフとお茶を飲みながら回想を楽しむ。また、旧加藤家住宅を含めて、回想法を行う場所として利用されている。

□ミニ駄菓子屋などの設置

駄菓子や懐かしいおもちゃを置き､それを目当てに子どもが入れ替わり遊びに訪れており、子どもたちと高齢者が触れ合う機会も増えた。

□懐かしいをテーマに季節行事等の開催

餅つき、芋煮会等、いきいき隊も楽しみながら、一般の来館の機会を広げている。

②「いきいき隊」の地域貢献活動

□回想法キットの解説書の作成

全国に貸し出している回想法キットの用具の解説書を彼らの回想を基に、エピソードを添えて作成している。

□誰もが参加できる会の開催

懐かしいものを作る会や唱歌を歌う会等を開催し､ＯＢ会員が新たな仲間を連れてきて、回想法の楽しさを体験できる場にもなっている。

□社会参加の活動

愛知万博で手づくりの懐かしいおもちゃと回想法を紹介。

□回想法キット「いきいき隊活動ＢＯＸ」の製作と管理

いきいき隊作成の手づくりおもちゃ等を詰め込んだキットを新たに製作し、その管理も実施。アクティブな回想に役立ててもらうと共に、同様な活動の提案を目的とするものでもある。

□子どもへの伝承教室の講師としての登録・活動

手づくりおもちゃでのふれあい会や水鉄砲教室など実施し､世代間交流を展開している。

５　まとめ

本館では、「昭和日常博物館の試み」をさらに展開させ、「回想法」「回想法キット」の拡充を図るとともに、平成１６年度「モノ語り博物館講座」を新設し、高齢者が回想を通じて語られた内容をもとに、高齢者自らによる企画、展示演出を実施し、さらにはボランティアとしての参加を促した。

平成１７年度には、急増する高齢者施設の見学に対応するため、高齢者入所施設向けの見学マニュアルの作成と提供をＮＰＯとの協働で行った。

今後も、歴史民俗資料館という施設が、様々な活動、地域貢献をしていくには、地域との連携が不可欠である。その点で、回想法を用いて地域高齢者と深い関わりを成立させることができたことは、ひとつの成果であった。

さらに、「いきいき隊」と地域、回想法センター、歴史民俗資料館の関わりを深めていくことで幅広い活動を行うボランティア活動を促していきたい。

ボランティア　川崎市青少年科学館の事例

元川崎市青少年科学館館長　若宮崇令

１　はじめに

川崎市青少年科学館は川崎市の北部に位置する、比較的自然の良く保全されている生田緑地と呼ばれる面積約 50 ヘクタールの都市公園の中に建設されている。開館は 1971 年であるが、はじめはプラネタリウムのみの施設であった。開館当時はまだプラネタリウムが珍しい時代であったので、小規模なプラネタリウムの割りには年間 12 万人ほどの観覧者があった。一方、プラネタリウムの公開業務の傍ら、周辺の自然の調査をし、生田緑地を訪れる学校団体や市民に自然情報を提供したり、自然観察会を開いたりした。そのような実践が評価され、1982 年、プラネタリウム館の横に本館が建設された折り、宇宙と身近な自然を扱う登録博物館になった。登録博物館とは名ばかりでとても小規模な地域博物館である。このことから分るように、充分な調査研究の成果と博物館資料が集まって、それらを教育普及したり収蔵管理するために博物館が出来たのではない。そこで地域の自然系博物館として恥ずかしくないように、早急に川崎市域の自然相を明らかにし、現在の自然の記録を標本と共に未来に伝えるため、市域の自然の調査をする必要に迫られた。調査を調査会社に委託するのはたやすいが、そうではなく、市民と共に汗を流し、足で稼いだ調査結果や標本であることが地域に根ざした地域博物館のあり方であると考え、市民参加型の調査を開始した。始めてみて参加する市民の人格、パワーに触れ、その素晴らしさに驚嘆感動し、ボランティアはお手伝い、無償の労働力というのではなく、ボランティアは共に歩み共に成長しゆくパートナーであるとの観点に立った。以来青少年科学館は市民に開かれた、市民と共に歩む博物館として 20 年有余にわたり、自然調査だけではなく各種ボランティアを導入して、市民の力を借りながら数々の活動を活発に展開してきた。ただ、青少年科学館の導入してきた各種ボランティアは高齢者を対象にしたものではない。しかし、高齢者の占める割合が多く、60 歳以上の方々も熱心に参加され、主体的に生き生きと活動されているのでその事例を紹介する。

２　事　例

（1）かわさき自然調査団

かわさき自然調査団は前述の通り、早急に市域の自然調査を行う必要に迫られて市民参加型の調査を実施することにし、市民に協力を求めたものが発端であった。参加する市民は手弁当、交通費も自己負担の全くの無償のボランティアである。1983 年に開始した第 1 次の自然環境調査は 5 年間、第 2 次調査は 3 年間、第 3 次からは 4 年間で実施し、現在実施中の第 6 次の調査まで 23 年間続行している。現在メンバーは 97 名、10 代 1 名、20 代 6 名、30 代 7 名、40 代 11 名、50 代 14 名、60 代 34 名、70 代 23 名、80 代 1 名である。植物、昆虫、野鳥、シダ、クモ、地学、水田ビオトープの 7 つの班に分かれて、大体週 1 回の活動日を定めて活動している。メンバーは高年令の方が多く、若手のほとんどは昆虫班に属しているという特徴がある。彼らの年間延べ活動日数は約 500 日、年間延べ活動人数は約 2000 名に達する。お陰で今では収蔵庫に入りきれないほどの膨大な調査結果と標本資料が集まり、青少年科学館の増改築が真剣に議論されるようになっている。第1次調査より23年間継続して参加しているボランティアも何人かいるが、年度で更新するようにしているので、毎年何人かが去り、何人かが加わってくる。ボランティアとして登録している人数は年ごとに多少の変動があるが、継続は力なりの通り、この間に調査ボ

ランティアはそれぞれの分野で同定力を付け、次第に専門家集団となった。それに伴い単に「自然調査団」と呼んでいたのを「かわさき自然調査団」と改名した。更に 2003 年、ＮＰＯ認証団体となって法人資格を取得して活動範囲を質量共に拡大している。青少年科学館の市域の自然調査を活動の基本に置いているが、青少年科学館からの事業を受託したり、その他教育委員会の施設や環境局の事業を受託したりしている。また、どこからか依頼されたというのではなく、自主的に講演会や自然観察会を開催したり、市民に呼びかけて樹木、野鳥、ホトケドジョウ、セミなどの生息分布調査なども実施し、川崎市域の自然環境の調査を市民レベルで実施している。また、自分たちで講演会を開催したり、求めに応じ市民館の講座などへ調査団員を講師として派遣している。最近は子どもたちを募集して田植えから収穫まで体験させる「里山の自然学校」なども開催している。このような活動が評価され、川崎市社会功労賞や神奈川県ボランタリー活動奨励賞など数々の賞を受賞している。また、それが励みとなり活動に拍車を掛けている。

（2）川崎アトム工房

「科学の町、川崎」を標榜する施策の一端として、青少年科学館ではわくわくドキドキするような科学実験装置や器具を詰め込んだ「わくわくドキドキ玉手箱」を開発し、市内のあちこちで数多くの科学実験実演をおこない、科学に親しんだ市民の育成をめざそうという事業を行っている。即ち、「科学の町、川崎」を底辺で支えていこうという趣旨の活動である。この事業には「川崎アトム工房」と命名したボランティアグループが協力してくれている。実験実演は青少年科学館を会場に行うこともあるが、ほとんどはあちこちへ出かけ、年間約 130 回、約 2 万人の前で出前実験実演をしている。出向く先は小学校、中学校、わくわくプラザ（学童保育）、子ども文化センター、子供会などである。また、不登校児や病院に入院中の子どもたちを対象にした科学実験実演にも出掛けている。青少年科学館に来館しないような子どもたち、あるいは来館できないような子どもたちに楽しい科学実験を体験させたいと、出前することに情熱を傾けている。現在メンバーは 16 名で 30 代 2 名、40 代 4 名、50 代 5 名、60 歳以上 5 名である。元教員、主婦、科学実験に興味のあるサラリーマン、リタイヤされた方等である。どちらかというと高齢者の方が多い。また、メンバーは玉手箱の開発にも生き甲斐と情熱を傾けている。

（3）サタデイ・サイエンス・スクール

定年退職された中学校の理科の教員 4 名が無償のボランティアとして、第 2，第 4 土曜日に学校では出来ないような学習を青少年科学館の施設設備を使って、中学生を対象に指導している。それぞれの専門分野は生物、物理、化学、地学である。年齢は現在全員 70 歳を越えている。年度初めに生徒を募集するが、参加した生徒は、初めはこの 4 名と一緒に生田緑地の自然観察をしながら自然の中に自分なりに興味を引かれるテーマを見つける。見つけたテーマに対してどのように研究を進めるかを元教員とじっくり話し合って方針を決め、個人個人それぞれ自由研究に取りかかる。これらの生徒に対してこの 4 名は分担を決め、個人教授しながら研究を進める。個人研究が主であるが、グループで研究することもある。お陰で子どもたちは毎年市内や県下で表彰されるような立派な研究成果を残している。この事例の場合、元教員のやりたいという申し出を受け、それに協力する形を取っている。青少年科学館の行っていることは年度初めの生徒募集と施設設備の提供、および多少の消耗品提供に協力するだけである。

（4）こども自然探検隊

年度初めに募集した小学4年生以上の子ども20～30名を対象に、毎月1回野や山や川、また近隣の博物館に出かけていって自然について学ぶ「こども自然探検隊」という事業がある。1年たつと参加した子どもたちの自然に対する見方がずいぶん鋭くなっているのに驚かされる。探検隊長に退職された小学校の教員で、植物、野鳥、水生昆虫の各専門家をボランティアでお願いしている。現在60代1名、70代2名である。このボランティアには交通費と弁当代程度の費用弁償をしている。またこの事業には現役の教員が30名程度登録し、毎回都合のつく者が4～5名ずつ引率指導にボランティア参加をしてくれている。先輩の教員である探検隊長からいろいろ学ぶ事が出来るという自己研修と、学校現場では見られない子どもたちの様子を見たいという熱心な先生方が参加してくれている。館の職員は1名が引率するだけであるが、毎回現役の先生が引率してくれるということで、父兄も安心して子どもを送り出すことができると好評である。

（5）その他

この他に月に1回だがキノコを学習し、年数回、市民向けのキノコの観察会を開催するボランティア、絶滅危惧種に指定されているホトケドジョウの生息池の維持整備するボランティア、プラネタリウムの番組作りをし、年数回投影解説をするボランティア等がいる。彼らはプラネタリウムの入場整理や天体観望会にも協力してくれている。

3　おわりに

川崎市青少年科学館では、このような多くのボランティアがいろいろな活動をダイナミックに行っている。特に高齢者向きのボランティアということは意識していないが、館全体の博物館活動を組み立てていく中で、市民の協力を得ることによって、単に職員が行うよりも効果的で、大きく事業展開していこうというねらいがある。参加協力してくれるボランティアは子育てを終わった主婦、リタイヤされた男性が多い。相対的に高年齢になっている。だが参加している人々は昔を懐かしむ、癒しを得るためではなく、自分の今まで蓄積してきた知識や力を社会に役立てたい、あるいは興味があったが今まで時間が無く勉強できなかったものを、時間が出来たのを機会に勉強したいという方が多い。また、その中で新たなコミュニケーションを楽しむという面もあるようだが、活動そのものにのめり込んで、やり甲斐、生き甲斐を感じているようである。

宇宙や自然を扱う地域博物館、広い意味での生涯学習施設をコンセプトにしている川崎市青少年科学館は、市民に出来るだけ成長してもらおう、そのための支援は可能な限りしていくというスタンスでいる。その一つにボランティアを位置づけている。そのことによって生き生きとした市民、元気な市民が常に出入りする活気ある博物館を目指している。活気ある博物館によって地域そのものも魅力を増し、可能性を高めることができる。市民に自己の価値や能力を気づかせ、自己の魅力を存分に発揮する場、生き甲斐の場を提供することによって、市民によって支えられ高められていく博物館になると思っている。今やボランティアの存在は欠かせない。

岡山県立美術館における高齢者ボランティアの活動について

岡山県立美術館学芸課長　守安 收

はじめに

岡山県立美術館では 1988 年 3 月の開館当初からボランティア制度を導入している。オープンに備えて前年に募集を行い、250 名を超える応募者の中から面接で選抜し、研修を済ませて 1 期生 58 名を採用した。任期は 1 年、定年制は設けず、希望すれば再任を妨げないというのが原則である。現在は 18 期生までが活動中で、現役ボランティアは 85 名を数える。これまで延べ 374 人が登録されており、1 期生も 6 人残っている。ただ男性は 1 期目で 2 名を採用したものの、その後しばらくの間、館の都合で女性だけをボランティアとして受け入れてきた経緯がある。しかしながら、13 期からは再び男性にも門戸を開放している。なお、この現役 85 人という数は、直接の担当者が 1 名という人的な面、研修場所等の施設面からも受け入れ可能最大数であろう。

また、当館では現役を退いた方々のほとんどがアベリア会（1 年以上ボランティア活動した OB・OG 組織。名称は本館を取り囲んでいる花名に由来）に加わり、館に関わる様々な情報を共有している。そして一部は今なおポスターの配布や臨時作業の補助等に参加するなど、貢献度は大きい。ちなみに、当館ではボランティアに対して謝金・交通費などは一切支給していない。現役はボランティア保険に加入しているが、この保険料も各人の負担である。ボランティアとしての利点は、館が催すあらゆる展覧会にいつでも無料で入場できること、一般とは別立ての研修や講座を受けることができるということ以外にはない。館ではボランティアを来館者と館とをつなぐスタッフとして位置づけ、その存在なしでは通常の運営が成り立たないほど深く依存しているにもかかわらず、活動自体はまったくの無償行為であり、館員としては感謝するばかりである。このことを最初にお礼とともに記しておきたい。

１．ボランティアの活動内容

当館では活動の基本を当番班においている。①当番班は 2 週間に 1 度、④館事務補助を除く全員が（平日は 10 時～ 16 時。土・日は 10 時～ 13 時、13 時～ 16 時の 2 班で、特別展開催時は前後各 1 時間延長）計 16 班に分かれ、館内各所で活動する。具体的にはエントランスや展示室を中心に館内施設への誘導、車椅子やベビーカーの斡旋、常設展の案内、ギャラリートーク等のサービスに加え、当日の新聞記事の切り抜きなどに従事する。

当番以外にも各人は任意で②専門班（新聞班、資料整理班、図書整理班）に所属したり、③ＶＴＰ（Visual Thinking Program　多くは子供対象に鑑賞体験コースを案内する）班に参加したり、諸資料の発送、講座・ワークショップ等各種催しの手伝いといった臨時作業に加わったりと様々である。ひとつのワークショップに企画段階からかかわると、開催が近づくにつれ、毎日来館といった事態さえ生じる。その他、本年度は希望者 8 名 に委嘱して④館事務補助として主に学芸関係の作業（回覧物の整理、発送等の指示、資料入力、パネル貼り等々）を任せている。この学芸担当事務職員といった性格の仕事量はかなり多いはずだが、淡々とこなしている。

２．ボランティアの構成

ここで当館ボランティアの構成を性別、年代別に一覧してみる。

■現役 85 人

うち男性11人（13%）、53才～74才（うち65才以上7人、男性中63,6%　全体比8,2%）

うち女性74人（87%）、20才～71才（うち65才以上4人、女性中 5,4%　全体比4,7%）

年代別	男女計	%	うち男性	うち女性
20 代	4	4, 7	0	4
30 代	2	2,4	0	2
40 代	11	12,9	0	11
50 代	38	44,7	2	36
60 代	26	30,6	7	19
70 代	4	4,7	2	2

まず男性であるが、絶対数が少ないのは 13 期生から採用再開したことも一因であろうが、応募者そのものが少ないことが最大の要因である。美術館でボランティアをするという意識が女性と比べると、まだまだ熟していないのだろう。聞き取り調査によれば、男性は概ね何らかの形で仕事をリタイアしたのをきっかけに申し込み、また美術に関する知識は初心者程度、ボランティア自体が初めてという人がほとんどである。しかし、皆、熱心に継続しており、本年度まで男性ボランティアが自ら退いた例はない。

女性は 40 代の後半から 60 代前半がおよそ 80 %を占め、男女合わせた全体の約 70 %という一大集団を構成している。したがって、この世代が当館の主力実働部隊ということになる。また 5 年以上続けている女性が 30 人を超すとはいえ、1 ～ 3 年といった比較的短期間で辞める例も見受けられる。その理由としては、採用前に抱いていたボランティアイメージとの齟齬もあろうし、家族の受験、転勤や介護といった外的要因もあるようである。そして 65 才以上（高齢者）となると、急激に減ってしまう。そろそろ後進に道を譲る、夫や親、孫の面倒をみるといった理由を挙げる人が多いが、女性の方が男性に比べて元気なうちに、それも早めに現役を退きたいという意識が強いのではあるまいか。その点、高齢者ということに限れば、男性の方がボランティアを継続しやすい状況にあるといえるのかもしれない。ともあれ当館においては、高齢者に対象を絞ると、ボランティア全体の男女比とは逆転現象が起きているのである。

３．高齢者ボランティア

男性 7 人、女性 4 人の高齢者ボランティアに対して、館としては何ら特別扱いをしていない。彼らは元気はつらつとして若々しく、高齢者という呼称に似つかわしくない。何より姿勢が良く動作や身なりが洗練されており、年下のボランティアや職員にとって良きお手本を示している。

それではここで、男性・女性のそれぞれ最年長者が平成 17 年を振り返り、記したコメントの一部を紹介してみよう。

◇男性：ＶＴＰの一員として参加した感動の 1 年間でした。学生たちの熱心な眼差しに接していると、私にも力強い活力を与えて下さるので感謝しています。

◇女性：基本の月 2 回の当番、ギャラリートークに加え、発送作業には時間の許す限り、日没まで参加。また訪ねてこられる真面目で純真な小・中生とは、子どもたちの感性を大切にしながら

対話。鑑賞を共有できる時間に微力ながらもナビゲーターとして努力しました。

続けてあと 2 人、別の高齢者のコメントから引用する。

◇美術館に親しみをもってもらえるきっかけになるような活動をできたらとの思でボランティアを続けています。

◇年数を重ねてもなかなかボランティアとしての進歩、向上の出来てない自分に歯がゆさを感じています。そんな時にいつも思うのは自分が「今出来ること」と「今すべきこと」を考え、整理して自分なりに出来るだけの努力していくことが、大切だと思っています。

彼らの向上心には敬服する。サービス対象の来館者やその場を提供している館に対して感謝の念すら抱いている。集まったコメントからは直向きな心持ちがひしひしと伝わってくる。彼らは来館者に対して一緒に「リラックスして共に美術を楽しみましょう」と語りかけ、新年度に向かって「体調面、その他の事情の許す限り気持ちを新たにして楽しく頑張りたい」と決意表明するのである。

４．今後の課題と問題点

当館ボランティアには高齢者が 13 %含まれているとはいえ、今のところ後期（75 才以上）の人はいない。しかし来年度には 1 人が、そのうち何人もが該当するようになるだろう。美術を、来館者を大切に思う人が自らの意志で活動すること、それも様々な世代の人が向上心を持ちながら努力することは、歓迎すべきである。そうした観点からすると、特に女性には自主規制（しているようにみえる）をせずにもっと年齢を重ねるまで継続してほしい。万一それを許さない環境があるとするならば、それは早急に改善されねばならない。

いずれにせよ、館はボランティアに対して肉体的な面では年齢に応じた業務提供を配慮する必要がある。ただし精神的には高齢者に限らず、やりがいを感じ取ることのできる仕事を積極的に任せるといったことを最優先事項とすべきであろう。すべてはそれに尽きると思われる。そして館はボランティアに感謝の気持ちを忘れず、しかもその気持ちを率直に表明することが大切だと考える。黙っていても通じあえるなどとは思わずに、声に出し、態度で示すべきである。当館の場合、職員全員がそういう気持ちであることはいうまでもないが、それがボランティア全員に伝わっているかは疑問である。たぶん、そう受けとめてもらっていないに違いない。

最後に当館の問題点を挙げておく。もう少し全体での組織化が図れないものだろうか。専門班といった単位では問題ないが、全体の意思疎通が十分できているとは思えない。私はいつも「ゆるやかな連帯」を大切にして多岐にわたる考えを「互いに認めあおう」と言っている。しかし、経験年数や年齢差が大きくなれば、館や仲間への思いが多様で複雑になるのはいたしかたない。館主導でとりしきるには限界があり、「のびきった連帯」では体を成さないと思う。

現状のままであっても、例えば館がボランティアと共に来館者に対する各種＜高齢者プログラム＞を用意していくことは可能であろう。具体的な内容を検討する時期が間近に迫っている。だが私は、そのプログラムの実践でスキルを磨いたメンバーが、館以外の場所にも進出していくことを願うものである。それも館主導ではなく、自主・自律的にである。当館から飛び出し、そこでの経験が次に展開される当館での活動に反映するような形態を望む。そうしたサイクルの中で活発な新陳代謝が起こり、一層の活性化がもたらされるのではあるまいか。

北九州市立美術館と高齢者の関わりをめぐる事例
－美術ボランティア活動および現代美術家によるプロジェクト紹介－

北九州市立美術館学芸員　花田伸一

１．はじめに

北九州市立美術館は西日本で初の本格的な公立美術館として 1974 年 11 月に開館し、今年度（2005 年度）で開館 31 年目となる。国内で初めて美術ボランティア制度を取り入れた館として知られ、また、国内外の現代美術を積極的に紹介し、収集に努めてきたことでも知られる。当館と高齢者との関わりについて、当館の特色といえる美術ボランティアの活動と現代美術展の二点からの事例を紹介したい。

２．美術ボランティア活動

北九州市立美術館では 1974 年 11 月の開館に先立ち、国内初の美術ボランティア制度を取り入れた。当館の初代館長の谷口鉄雄がニューヨーク近代美術館（MoMA）において現地のボランティア活動を視察し、感銘を受けたことによる。

開館前の 1974 年 6 月に市内とその近郊の婦人を対象に美術ボランティアを募集したところ、150 人の応募があった。当時の応募者の中心は、経済的にも時間的にも余裕のある主婦で、年齢層は 30～40 歳代が中心であった。その当時からの継続メンバーが、現在 60～70 歳代となっており、現在でも後進を積極的にリードしている。その後もメンバーの減少に応じて不定期に募集。おそらく 1995 年の阪神淡路大震災以降、ボランティア活動が一般に広く認知されたこともあって、2005 年に 6 期生を募集した際には、応募者は主婦層ばかりでなく、社会人や学生、そして男性も増え、世代も 20～70 歳代に広がるなど、応募者の層も多種多様になった。

2005 年度に、時間的な制約を持ちつつも美術ボランティアに関わりたいという強い要望に応えるべく、週末のみの活動にしぼった特別枠を設けたが、それ以外は基本的に美術ボランティアの中でのグループ分けをせず、メンバー全員が全ての活動を一通りこなせることを旨としている。

＜活動内容＞

ａ）勉強会

毎週木曜日の 13:10～15:10 に全員が集まり勉強会を開く。
研究発表…美術ボランティア１人で１人の美術家を担当し発表。
展覧会解説…企画展・常設展に関して各担当学芸員による解説。
資料整理…新聞切抜き等。

b）常設展示室ギャラリートーク／団体鑑賞者向けガイダンス

開館日の 10:30〜12:30、13:30〜15:30 に、2 人ずつ当番で展示室にて待機し、来館者の求めに応じて、収蔵品に関してトークを行う。来館者の興味を自然に引き出し、会話を楽しみながら作品を鑑賞してもらうことを主眼とし、説明の押し付けにならないよう心がけている。また、団体鑑賞のグループからの申し出に応じて、美術ボランティアがガイダンスにあたる。

c）おもしろミュージアム（小中学生向け鑑賞プログラム）サポート

当館では企画展・常設展の開催にあわせて、小中学生を対象とした鑑賞プログラム「おもしろミュージアム」を行っているが、美術ボランティアがそのサポートにあたる。ときに子供以上に大人が夢中になる場面もある。

d）研修旅行

年に１回、研修旅行として大型バスを借り切って１泊２日で他館の見学を行う。

特別枠の週末グループにしろ、レギュラーグループにしろ、いずれも異世代・異職種間の交流の場となっているようだ。また、他館でも同様であろうと思われるが、ボランティア活動を通じて勉強会を開いて研究発表をしたり、ギャラリートークや団体鑑賞者へのガイダンスを行うことで、常に人前に出て話す機会を持ったりと、日々の生活に適度の緊張感がもたらされ、そのことが美術ボランティアメンバーの思考の柔軟性や精神的な若々しさの維持に貢献していると思われる。

３．現代美術家によるプロジェクト〜島袋道浩「二度起こること：象の話し」

美術ボランティアと並んで、北九州市立美術館の特色として挙げられる現代美術の自主企画展から、高齢者との関わりが印象深かった事例を紹介する。

島袋道浩「二度起こること：象の話し」

絵画や彫刻など「モノ」としての作品ではなく、美術家が展示室や町の中で何らかの「できごと」を起こし、観客にそこに関わってもらう参加型展覧会「6 th 北九州ビエンナーレ〜ことのはじまり〜」展を 2001 年 3 月に開催した。

参加アーティストの一人として招かれた島袋道浩は、会期の４ヶ月前に北九州を訪れ、市内の小学校および公民館をた

ずね、北九州にゆかりのある言い伝えや昔話、あるいは現代のちょっと変わったお話などを聞いてまわった。そこで得られた美しい話や面白い話を参考に、彼自身のプロジェクトの発想を膨らませるためである。

島袋が注目したのは、江戸時代に貿易商人が徳川吉宗将軍への土産として海外から象を日本に連れこみ、そのゾウを長崎から江戸城まで歩かせて連れて行ったという史実。北九州も大名行列の通る長崎街道の筋道にあたり、このゾウに関する言い伝えが残っている。

この象の逸話をもとに、展覧会の会期中、展示室にて観客をまじえて木と紙で象を制作したが、その過程で多く高齢者の方から江戸時代の象に関する資料や情報の提供があった。

できあがった象を連れて実際にゆかりの場所へ出かけていき、町の中を散歩した。その過程でも、一緒に楽しんでくれたのは子どもたちよりも、むしろ高齢者であった。彼らは江戸時代の象の逸話をよく知っていた。

町の散歩から美術館に戻り、北九州の昔話を小学校で読み聞かせる会「語り部の会」の有志メンバーとともに、今回の現代の象の話を昔話風に仕立てて、講話会を開いたところ、通常は若い世代にしか見向きされない現代美術展に高齢者が多く集まり、企画者である私自身も驚かされた。

この象プロジェクトでは、地域ゆかりの逸話を取り上げた点、展示室から町の中へ出て行き、老若男女を問わず接する機会を作った点などから、結果、高齢者も含めて楽しめるものとなった。

４．おわりに

ボランティア活動にしろ、現代美術展にしろ、当館では高齢者向けに特別なプログラムを行っているわけではないが、制作に向かう美術家の真摯な姿勢や、美術家や美術作品が元来備える「生」への力が、高齢者を含め、関係者や観客に精神的な「張り」をもたらしているのだといえよう。また、美術家の鋭いアンテナ、自由な発想と行動力、ユーモア等に、人々の精神が触発されることで、結果、高齢者も含め、地域に埋もれる文化資源や人的資源が掘り起こされていると考える。

６．「博物館とボランティア」に関する参考文献

四国大学大学院教授　真鍋俊照
宝仙短期大学講師　大沢康子

今日では「高齢者と博物館」は、利用・入館の関係とは別に、館側（内・外）で働いている、いわゆるボランティアスタッフが数多く存在している。本稿では、本委員会の検討で必要とした参考資料・文献を中心に纏めて掲げることにした。したがって博物館ボランティアに関わる単行本・雑誌等の研究論文・報告書・座談会・シンポジウム等は、この他、かなりの文献があることをお断りしておきたい。

１．書誌

博物館とボランティア活動が教育普及と密接なかかわりをもちながら展開されている現状を捉えたものが多い。地方をできるだけ各地区に分類し、今後はさらに細分化した活動内容別に収録する必要がある。

○　ボランティア活動／沖縄県立博物館．1994-2006
　・　平成５年度～平成 17 年度（毎年刊行）
○　風雪の路-開拓の村 20 周年記念誌-「Ⅳ．ボランティアによる来村者サービス」―北海道開拓の村．2005
○　東京動物園ボランティアーズ 30 周年記念誌 1974-2004―東京動物園協会．2005
○　全国博物館ボランティア研究協議会 ／第１回～５回―国立科学博物館編刊．1996-2004
　・　第１回―1996.12
　・　第２回―1998.3
　・　第３回―2000.6
　・　第４回―2002.10
　・　第５回―2004.9
○　ボランティア10年のあゆみ／ミュージアムパーク茨城県自然博物館ボランティア記念誌編集委員会．―ミュージアムパーク茨城県自然博物館，2004.7
○　群馬県立近代美術館ボランティア 10 周年記念誌＋美術館ボランティア・フォーラム開催記録／群馬県立近代美術館ボランティア.―群馬県立近代美術館，2004.3
○　ボランティアの本／水戸芸術館現代美術センター.―文化庁，2004.3―（水戸芸術館現代美術センター資料；第 62 号）
○　徳島城博物館への招待／徳島市立徳島城博物館ボランティア友の会．―徳島市立徳島城博物館ボランティア友の会，2004.3
○　参画・体験・発見学習の心理と応用／野外教育研究財団．―改訂 2 版．―野外研究財団 2003.3.―（「文化ボランティア推進モデル事業」博物館解説ボランティア研究方法論開発研究成果報告；2）
○　博物館アンケート全国調査．平成 15 年度／野外調査研究財団．―野外調査研究財団，2003.3.―（文化ボランティア推進モデル事業 - 調査研究報告書；1）

○　下町の古代を探る古代大嶋邸と戸籍．―葛飾区郷土と天文の博物館，2003.1
○　都道府県立博物館におけるボランティア活動状況実態調査報告書／新井一政，神奈川県立生命の星・地球博物館．―2000 - 2002―
○　日米共催の展示における学習プログラムとボランティア活動／中牧弘允．―国立民族学博物館，2002.2.―（国立民族学博物館調査報告；26）
○　美術館とともに歩んだ 10 年／「しらかばの会」記念誌編集委員会.―北海道立帯広美術館ボランティア「しらかばの会」，2001.12
○　がんばれ美術館ボランティア／嶋崎吉信，清水直子.―淡交社，2001.9
○　私も美術館でボランティア／淡交社美術企画部.―淡交社.1999.12
○　心に刻み、未来を見据え／秋田展実行委員会．―秋田平和学習センター．1997.6―
○　博物館等の生涯学習施設における専門職員とボランティアの位置に関する研究／鈴木眞理，東京大学．―1995-1997
○　博物館ボランティア活性化に関する調査研究／新井一政，神奈川県立歴史博物館．―1995 - 1997
○　美術館とボランティア／赤星千春，大橋浩美，黒沢伸.―水戸芸術館現代美術センター，1997.3.―（水戸芸術館現代美術センター資料；33 号）
○　北海道開拓の村十周年記念誌村とともに「永続していてほしいボランティア」／松田幸男―北海道開拓の村ボランティアの会．1997
○　北海道立函館美術館ボランティアいちいの会 10 周年記念誌.―北海道立函館美術館ボランティアいちいの会，1997.1
○　教育ボランティア活動 10 年のあゆみ―国立科学博物館．1996
○　博物館ボランティア導入の手引．平成 6 年度―日本博物館協会．1995
○　北九州市立美術館 20 年誌「美術館の運営」／谷口鉄雄―北九州市立美術館．1994
○　博物館ボランティア活性化のための調査研究報告書―日本博物館協会．1994
○　美術館・博物館は「いま」-現状からの報告 24 篇「協力し合うー友の会・ボランティア活動」／三ッ山一志―日外アソシエーツ．1994
○　美術の森の中で「美術ボランティアの誕生」／谷口鉄雄―北九州市立美術館．1994
○　開かれた博物館をめざして「第 1 節 生涯学習社会と博物館の役割」／大堀哲―国立科学博物館編刊．1991
○　博物館ボランティア実態調査に関する報告書―日本博物館協会．1987

２．博物館研究

日本博物館協会の「博物館研究」でテーマ設定した、「博物館とボランティア活動」から、最近の論考・解説報告・活動内容を収録した。

○　西洋美術館ボランティア＝導入から初年度の活動まで／酒井敦子
vol.40　№11（№450）平成 17 年 11 月
○　市民とともに創る博物館―なぜ、ボランティア制度を導入するのか／石川昇

vol.40　№5（№444）平成 17 年 5 月

○　東京国立近代美術館の解説ボランティア―MOMATガイドスタッフ／一條彰子・白濱恵理子
vol.38　№11（№426）平成 15 年 11 月

○　はじめてのボランティア展示を終えて／香川県歴史博物館　ボランティア展示担当グループ
vol.38　№4（№419）平成 15 年 4 月

○　生涯学習とボランティア活動拠点としての新・紋別市立博物館／佐藤和利
vol.37　№8（№411）平成 14 年 8 月

○　熊本博物館案内ボランティア活動 10 年のあゆみ／野口恒夫
vol.37　№8（№411）平成 14 年８月

○　随筆 博物館ボランティアに多謝／前沖縄県立博物館 平田興進
vol.37　№5（№408）平成 14 年 5 月

○　体験者年間 4 万人への挑戦―体験学習とボランティアの活動―／新井和良
vol.36　№10（№401）平成 13 年 10 月

○　川崎市少年科学館のボランティア「かわさき自然調査団」について／若宮崇令
vol.36　№8（№399）平成 13 年 8 月

○　ボランティアは博物館の応援団／金子一夫
vol.36　№3（№394）平成 13 年 3 月

○　徳川美術館におけるボランティア活動について／小池富雄
vol.36　№1（№392）平成 13 年 1 月

○　博物館ボランティア活動について＜神奈川県立歴史博物館の現状＞／相馬孝昭
vol.35　№11（№390）平成 12 年 11 月

○　葛飾区郷土と天文の博物館ボランティア「葛飾考古学クラブ」の現状と課題／谷口榮
vol.35　№8（№387）平成 12 年 8 月

○　上野動物園のボランティア活動／浅井ミノル
vol.35　№7（№386）平成 12 年 7 月

○　野外博物館のボランティア活動　北海道開拓の村ボランティアの現状と課題
／中島宏一・守屋亜紀子　　vol.35　№6（№385）平成 12 年 6 月

○　ボランティアによる博物館活動の活性化―国立科学博物館の教育ボランティア及び全国博物館ボランティア研究協議会を中心に―／石川昇　　vol.35　№5（№384）平成 12 年 5 月

○　巻頭言 江戸東京博物館におけるボランティア活動／竹内誠
vol.35　№1（№380）平成 12 年 1 月

３．雑誌記事

本委員会で検討対象とした雑誌記事を中心にして収録した。ただ収録するに当たり、時間的制約もあり、地域的に片寄りがあることをご理解いただければと思う。

○　月刊ミュゼ

・ ボランティアメッセ 2005　博物館ボランティアの集い　vol.73［2005.11］
・ 館の友の会とボランティアグループ　vol.71［2005. 7］
・ Volunteer 利用するを越える ボランティア発のネットワーク　vol.65［2004.7］
・ ボランティアメッセ 2004　つながりあう未来のミュージアム　vol.65［2004.7］
・ 利用者デザインから考えるミュージアム・ボランティア　vol.58［2003.5］
・ 学校と美術館を地域ボランティアがつなぐ　vol.47［2001.6］
・ マネージメントからみるミュージアムのボランティア　vol.20［1996.12］

○ 多摩のあゆみ 特集わたしたちの図書館・博物館
財団法人たましん地域文化財団　（通号 120）[2005.11]
・ ボランティアが博物館を変える―「公共博物館」への道／佐々木秀彦
・ ボランティアが集う博物館―府中市郷土の森博物館にて／荒牧英毅

○ 公共施設の再生・活性化策を探る(８)地域・ボランティアとの連携が博物館の魅力を再生した―江戸東京たてもの園　ガバナンス.（44）[2004.12]

○ 生涯学習系学部生の博物館資料整備ボランティア／水野信太郎
生涯学習研究と実践.（6）[2004]

○ 〔岐阜県〕博物館ボランティア活動の活動例―ボランティアの方と共につくりあげていく植物標本制作と整理活動／井上好章　岐阜県博物館調査研究報告.（25）[2004]

○ 博物館ボランティアの学習を支援する博物館専門職員の役割―博物館ボランティアに対するコーディネーションを中心として／中島宏一　生涯学習研究年報.（10）[2004.3]

○ “考古楽者”とあゆむ―新しい博物館と新しいボランティアの未来のために／種定淳介
考古学研究.50（3）（通号 199）[2003.12]

○ 公立博物館における市民連携活動の転換に向けて―首都圏の公立博物館におけるボランティア活動の実態／菅井薫　21 世紀社会デザイン研究.（2）[2003]

○ 特集 実践・体験レポート―読書ボランティア・お話会・博物館見学　子どもの本棚.32（12）（通号 422）[2003.12]

○ ボランティア・ＮＰＯレポート―新しい価値の創造に向けて「KALEIDOSCOPE－６人の個性と表現－」展・関連企画「こんな美術館、あったらいいな！―美術館と市民社会―」―企画：エイブル・アートジャパン 主催：世田谷美術館、エイブル・アートジャパン
月刊福祉.86（13）[2003.11]

○ 美術教育とボランティアへの取り組み／白濱恵理子
Lisn.（116）[2003.9]

○ 特集 The Art Navigators　アートの仕事がしたい―ボランティアからスペシャリストまで
美術手帖.55（836）[2003.7]
・ インタビューキュレーター 美術評論家 金沢 21 世紀美術館（仮称）建設事務局学芸課長 第五十回ヴェネツィア・ヴィエンナーレ日本館コミッショナー長谷川祐子
／長谷川祐子；原久子
・ インタビューキュレーター 国立国際美術研究員 平芳幸浩／平芳幸浩；原久子

○ 事例クローズアップ ボランティアと一緒につくる博物館―自立した組織とのパートナーシップ

兵庫県立「人と自然の博物館」とＮＰＯ法人「人と自然の会」の取組　　マナビィ.（22）[2003.4]

○　大学・博物館・学校にボランティアを加えた地質の野外観察支援システムの構築／松川正樹；林慶一　　地学教育.56（2）（通号 283）[2003.3]

○　文化を守る注目の地域活動を一挙紹介―さがみ湖・森つくりの会／むさしの里山研究会／22 世紀の森づくり・神代宍塚の自然と歴史の会／舞岡公園田園・小谷戸の里管理運営委員会／トトロのふるさと財団／芦安ファンクラブ／富士山ナショナル・トラスト／トンボと自然を考える会／砂浜美術館／信州須坂町並みの会／花のボランティア藤沢（特集 日本の資産「環境」を考える）環境会議（通号 15）[2002.3]

○　生涯ボランティアによる人権学習支援とは―大阪人権博物館のガイドボランティアを例に／近藤亜紀子　　部落開放研究.（149）[2002.12]

○　資料ロサンゼルス群立自然史博物館でのボランティアによる学校団体への展示解説案内について／山崎晃司　　茨城県自然博物館研究報告.（5）[2002.3]

○　特集 地域社会と博物館(2)博物館ボランティア
Museum ちば.（33）[2002.3]

・　浦安市郷土博物館におけるボランティア活動／田中清美
・　市立市川考古博物館におけるボランティア活動／領塚正浩
・　八千代市文化伝承館におけるボランティア活動／木原義和
・　八千代市立郷土博物館におけるボランティア活動／海野鉄太郎
・　国立歴史民俗博物館におけるボランティア活動／小瀬戸恵美
・　佐倉市立美術館におけるボランティア活動／永山智子
・　川村記念美術館におけるボランティア活動／沼辺信一
・　睦沢町立歴史民俗資料館におけるボランティア活動／久野一郎
・　千葉県立房総風土記の丘における博物館ボランティア活動／田形孝一
・　航空科学博物館におけるボランティア活動／金田彦太郎
・　佐原の町並みにおけるボランティア活動／紺野浩幸
・　袖ヶ浦市郷土博物館におけるボランティア活動／多田信子
・　上総博物館におけるボランティア活動／鈴木定明
・　千葉県立安房博物館におけるボランティア活動／小藤田一幸
・　おわりに〔含 千葉県博物館協会加盟館園一覧〕

○　ボランティア（2）開かれた博物館とは何か―ボランティアが歴史を語る／鈴木章生
コミュニティ.（130）[2002]

○　新しい美術館でのボランティア／池内久子
兵庫県立美術館開館準備ニュース［2001］

○　公開シンポジウム「博物館と大学を結ぶ」『博物館とボランティア』
静岡大学生涯学習教育研究.（4）[2001]

・　基調講演 博物館とボランティア／神谷浩
・　事例報告〔愛知県陶磁資料館〕／浅田員由
・　事例報告 静岡県立美術館 静岡県立美術館のボランティア活動／飯田真

・　事例報告 静岡市立登呂博物館／浅野毅
・　事例報告 日本平動物園／佐渡友陽一
・　事例報告 細江町立姫街道歴史民俗資料館／栗原雅也
・　討論 質疑

○　“自立的に成長できる”ボランティアを目指して／佐渡友陽一
動物園研究．　vol.5（№.２）［2001］動物園研究会

○　自発性、創造性を引き出す施設ボランティア活動の開発／石川昇
日本生涯教育学会論集 21．日本生涯教育学会［2000.７］

○　博物館を活動の場とするボランティアの位置づけ／布施和夫
博物館雑誌．全日本博物館学会［1999］

○　博物館おけるボランティアの現状-北海道開拓の村ボランティアを例として-／高尾戸美、百瀬響
平成６・７年北海道教育大学教育研究学内特別経費成果報告書 ボランティア活動と地域社会・大学［1996］

○　熊本博物館の「案内ボランティア」について／福本信子
熊本博物館館報（№6）［1995］

○　特集 美術館におけるボランティア活動
美術教育研究　vol.６（№.１～2）［1995］

○　インタープリテイションとボランティアガイド／前田真之
沖縄県立博物館紀要第 20 合．沖縄県立博物館［1994］

○　対話型博物館とボランティア／大堀哲
学士会会報（№805）学士会［1994］